非アラビア文字表記新ペルシア語

矢島　洋一

はじめに

所謂近世ペルシア語は，イラン語史上では新ペルシア語 (New Persian) と呼ばれる段階のペルシア語を指す。ただし，近世ペルシア語という用語がアラビア文字表記ペルシア語を指すことが多い[1]のに対して，新ペルシア語は必ずしもアラビア文字のみで表記されてきたわけではない。本稿では，それら非アラビア文字表記新ペルシア語について実例と先行研究を紹介しつつ概観すると共に，それらの資料をペルシア語文化圏研究に利用する可能性を探りたい。

アラビア文字以外の文字で表記されたペルシア語（以下，単にペルシア語といえば新ペルシア語を指すものとする）には，単に

(1) 非アラビア文字を通常の表記として用いているペルシア語

の他にも，より広く考えれば

(2) ペルシア語以外の非アラビア文字文献におけるペルシア語の音写

(3) 非アラビア文字言語において借用語となっているペルシア語語彙

をも含むことができる。これらのうち (1) と (2)，(2) と (3) の境界はしばしば曖昧である。(3) は本稿の関心とは直接関わらないためここでは扱わず，以下 (1) と (2) のケースについて検討する。

1. 非アラビア文字によるペルシア語表記

中期ペルシア語 (Middle Persian) から新ペルシア語への移行においては，音韻・形態・統語上の若干の変化の他に大量のアラビア語語彙の借用が行われたが，それは必ずしもアラビア文字表記への移行を伴ってはいなかった。一般に言語と文字との繋がりは弱いのに対して，宗教と文字との繋がりは強固である。アラブ人ムスリム

[1]例えば，森本 2009, 4 を見よ。

によるイラン高原と中央アジアの征服によってペルシア語にアラビア語語彙が流入してから，それらの地域にイスラームが浸透してアラビア文字表記が支配的になっていくまでの間，ペルシア語を母語とする非ムスリムはそれぞれの宗教固有の文字で新ペルシア語を表記していた。それら非アラビア文字表記の一部はやがて廃れたが，一部は近代に至るまで存続した。

1-1. マニ文字

マニ文字は主に中期ペルシア語マニ教文献の表記に用いられていたが，ベルリンのトゥルファン・コレクションのマニ文字ペルシア語文献の中には一部新ペルシア語の段階に入っているものがあり，概ね9～10世紀に比定されている[2]。以下はそのような断片の一部である[3]。

... (k)[y](rd)n ‘yg pnj | (h)w’s ’wd frwd | d’štn ‘yg hft̲ | wsw’s hft̲ | (g)wng srwš’yẖ | (’w)d dw’zdẖ ...

... kerdan-i panǧ ḥawāss wa furōd dāštan-i haft waswās wa haft gōn surōšī wa dawāzdah ...

五感を…することと，七つの誘惑・七種の服従・十二の…を滅却すること…

エザーフェ ‘yg や接続詞 ’wd など一部に中期ペルシア語の綴りを残しているが，**ḥawāss**，**waswās** といったアラビア語語彙を含み，新ペルシア語の特徴を具えているのがわかる。

また，以下はマニ文字ペルシア語による詩の一部である[4]。

cwn ywspm pkhr prwd ’ab[gnd] pc’h / č’hyy k’ br ny’[ym] ’w cwzg’hyy šm’r

čūn yūsuf-am pa-qahr furōd abganad pa-čāh / čāh-ī ki bar nay-āyam az-ū ǧuz gah-ī šumār

---

[2] Boyce 1960, 150 によれば，同コレクションには細かい断片を含めて 22 のマニ文字新ペルシア語文献が含まれているが，うちいくつかは同一写本に由来する断片なので，実際の文献数はそれより少なくなる。なおそれらの一部は国際敦煌プロジェクト (International Dunhuang Project) のウェブサイト (http://idp.bl.uk/) でカラー写真が公開されている。研究として，Henning 1962; Sundermann 1989; Sundermann 2003 がある。

[3] Sundermann 1989 における写真版と翻字 (transliteration) をもとに転写 (transcription) を作成した。( ) は一部，[ ] は全体が破損した文字の復元で，縦線は原テキストにおける改行を表す。

[4] Henning 1962 による。

ユースフの如く，彼は私を穴に投げ込む ／ 勘定の時まで上ってこれない穴に

この詩は，アラビア語詩の韻律に基づくペルシア語詩の韻律ムダーリウ (muḍāri‘) に従っているので，本来アラビア文字で書かれていた詩をマニ文字に写したものと考えられている。従って，単純にマニ文字からアラビア文字に切り替わったわけではなく，マニ文字とアラビア文字が併存し，後者が前者に影響を与えていた時期もあったようである。しかしマニ文字によるペルシア語の表記は，マニ教が衰退しイラン人の多くがイスラーム化していく中で消えていった。

1-2. シリア文字

ネストリウス派キリスト教文献には，シリア文字で書かれたペルシア語が含まれる場合があり，旧約聖書の訳や，祈祷書に挿入された詩など[5]が知られている。ただ残存数が少なく，どの程度シリア文字による表記が一般的であったかは不明である。以下は，東トルキスタンで発見された旧約聖書シリア文字ペルシア語訳の一部（詩篇 147: 5-8）[6]である。

ܘܦܕܝܐܘܢܕ ܐܣܬ ܙܘܪܫ	wa pādyāwand ast zōraš
ܘܢܝܣܬ ܓܘܡܠܓܝ ܡܪ ܫܝܢܐܣܝܫ ܪܐ	wa nīst ǧumlagī mar šināsāyiš rā
ܒܙܘܪܓ ܟܘܢܕ ܡܪ ܕܪܘܝܫܢ ܪܐ	buzurg kunad ḫudāh mar darwīšān rā
ܘܦܐܣܬ ܟܘܢܕ ܡܪ ܒܝܕܐܕ ܓܪܢ ܬܐ ܙܡܝ	wa past kunad mar bēdād-i garān tā zamī
ܣܝܬܝܫ ܬܗܐܕ ܡܪ ܚܘܕܐܗ ܪܐ ܦܐ ܣܝܬܝܫ	sitāyiš tahād mar ḫudāh rā pa sitāyiš
ܣܘܪܘܐܕ ܡܪ ܚܘܕܐܗ ܪܐ ܦܐ ܟܢܢܐܪ ܗܐ	suruwād mar ḫudāh rā pa kennār-hā
ܟܝ ܦܘܫܢܕ ܐܣܡܢ ܪܐ ܦܐ ܐܒܪ ܗܐ	ki pōšānad āsmān rā pa abr-hā

彼（神）の力は強く／叡智には限りがない／主は貧者たちを育み／ひどい不法者を地に下す／主を讃美でもって讃えよ／主について琴でもって歌え／それは，雲で天を覆うお方

[5]前者については次注，後者については Orsatti 2003 ならびにそこで言及されている先行研究を参照。他に Maggi 2003 は，8〜10 世紀の文献に見えるシリア文字ペルシア語語彙を採集し分析している。

[6]Müller 1915; Sundermann 1974 を参考に作成した。なおシリア語部分は省略した。

これらはシリア文字ペルシア語単独で書かれた文献ではなく，シリア語など他言語文献の一部にペルシア語が挿入された形をとっているので，単なる音写の方に分類するべきかもしれない。しかし，比較的後世の写本においてもシリア文字ペルシア語は見られるので，その習慣自体は僅かであれ存続したようである[7]。

1-3. ヘブライ文字

ヘブライ文字ペルシア語は一般にユダヤ・ペルシア語 (Judaeo-Persian) と呼ばれる。ヘブライ文字は早いうちからペルシア語の表記に用いられ，さらに近現代にいたるまでペルシア語を母語とするユダヤ人コミュニティーにおいて用いられ続けた。その資料は非アラビア文字表記ペルシア語の中で他を圧して豊富であり，時代的にも地域的にも広く分布している。ジャンルの上でも，文書類，碑文，旧約聖書の翻訳・注釈，その他ユダヤ教文献，詩などバラエティーに富む。研究も多く，ここでは言及しきれないので[8]，以下，主要な資料のみ概観する。

まず文書類として，スタイン (Marc Aurel Stein, 1862-1943 年) が東トルキスタンのダンダン・ウイリクで発見した 8 世紀に比定される手紙の断片[9]，オックスフォード大学所蔵の 11 世紀アフワーズの法廷文書[10]などが重要である。以下は，後者の冒頭部である。

אידון בוד אפיש י אימאן שהדאן י כטמאן אזיר אין מחצר נבישתא היסת פא הורמשיר שהרי
אז צומלא כוזיסאן כו איסתאדא היסת אור דור י אולי פא מה י אן י שבט סאל אלשלב למנין |

---

[7]上述のシリア文字ペルシア語を含む祈祷書の最古の写本は 16 世紀のものであり，またその書写生はある程度ペルシア語の知識を持っていたと推測されている [Maggi 2003, 148-149]。

[8]ユダヤ・ペルシア語については Lazard 1974 が優れた概説で，そこに主要な研究文献も網羅されているが，その後の研究状況については Paul 2003 などで補う必要がある。Moreen 2000 はユダヤ・ペルシア語文献の英訳アンソロジーである。以下に述べるユダヤ・ペルシア語資料の中で，研究を言及しているもの以外についてはこれら三つの文献ならびに *Encyclopaedia Iranica* における関連項目を参照。

[9]Stein 1907, vol. 2, plate CXIX に写真版が掲載され，また同書には Margoliouth によるテキストと訳注が提示されている。その後の研究としては Utas 1969 が写真版・ヘブライ文字テキスト・転写・訳注を含む最も包括的なものである。また Utas は Moreen 2000, 23-24 に翻訳のみ改訂版を寄せているが，注がなく変更点の根拠は不明である。

[10]Asmussen 1965 がその写真版・翻字・語彙集で，MacKenzie 1966 がそれに対し若干の訂正とともに翻訳を補っている。

שטרות | חצרא בודינד אפיש מאן חנה בת ישראל בן יעקוב נוחו עדן ואחצרא כירד אדניאל בן ראובין ועזריה י מערוף | פא בצא ואידון גופת אין חנה בת ישראל כו שוד היסת אין דניאל בן ראובין ודאמאדום אבי פירמאנום ואבי | שהותום וכנד אז מרא ובראדראנום י פא מיצר הינד שש צופתדר ופרוכת פא ביסת ופנץ דינאר ואין מרא | מילך י בראדראנום בוד סהל ויוף וסעיד בני יסשראל בן יעקוב נוחו עדן ...

ēdōn būd u-pēš-i ēmān sāhēdān ḫaṭṭmān azēr ēn maḥḍar nibišta hēst pa hurmšīr šahrī | az ǧumla ḫūzistān kū ēstāda hēst awar dawr-i awwalī pa mah-i ān-i šebaṭ sāl 1332 l-minyān štarōt | ḥaḍara būdēnd u-pēš mān ḥannah bat yisrā'el ben ya'qūb nōhō 'ēden wa iḥḍār kerd u-dānyāl ben re'ūbēn wa 'azaryāh-i ma'rūf | pa bačča wa ēdōn guft ēn ḥannah bat yisrā'el kū šud hēst ēn dānyāl ben re'ūbēn wa dāmādum abē firmānum wa abē | šahwatum wa kand az marā wa barādarānum-i pa miṣr hēnd šaš ǧuftdurr wa furōḫt pa bīst wa panǧ dīnār wa ēn marā | milk-i barādarānum būd sahl wa yūsuf wa sa'īd bnē yisrā'el ben ya'qūb nōhō 'ēden ...

我々の許に証人がおり，その署名はこの文書の下部に書かれている。フーズィスターンの町であるフルムシールにおいて，セレウコス暦 1332 年 11 月 1 日に。我々の許に，ヤアクーブ——エデンにて安らかに——の息子イスラーエルの娘ハンナと，召喚されたレウーベーンの息子ダーニヤールと，「子供」と呼ばれている (?) アザリヤーが出頭した。このイスラーエルの娘ハンナは以下のように述べた。「このレウーベーンの息子ダーニヤールと私の夫は，私の指示でも私の望みでもないのに，私とエジプトにいる私の兄弟たちから 6 揃いの真珠を持ち去り，25 ディーナールで売り払ってしまいました。それは私と，私の兄弟である，ヤアクーブ——エデンにて安らかに——の息子イスラーエルの息子たち，サフルとユースフとサイードの私有財だったのです。…」

碑文の多くは墓碑であり，特にアフガニスタンで多く発見されている[11]。碑文には死者の名，日付，祈願文，旧約聖書の引用などが記される。

旧約聖書関連では，最古のものは 11 世紀末から 12 世紀初頭に比定されているエ

[11]古いものとしては，異論もあるが 8 世紀に比定される Tang-i Azao 岩壁碑文があり，Henning 1956 がそのテキストと訳注。なおその碑文は 1955 年に日本の探検隊も調査している [梅棹 1956, 188-190]。Gnoli 1964 は 12 世紀の墓碑十数点を扱う。

ゼキエル書注釈で，一部中期ペルシア語の特徴を留めている。旧約聖書自体のユダヤ・ペルシア語訳がいつ始まったかは不明であるが，現存最古の写本は 1319 年のモーセ五書の訳であり，概ね 14～15 世紀盛んに訳されたと考えられている。他にも聖書に取材した物語やユダヤ教の教義解説なども書かれた。

詩は，さらにユダヤ・ペルシア語によるオリジナルの詩と，アラビア文字ペルシア語詩のヘブライ文字転写の二つに分けられる。前者では 14 世紀のシーラーズのシャーヒーン (Šāhīn) や，15～16 世紀のカーシャーンで活動したイムラーニー (‘Imrānī) らが名高い。中央アジアにおいてもユダヤ・ペルシア語による詩作の伝統がブハーラーのユースフ (Yūsuf Yahūdī, 1755 年没) 以降盛んとなった。狭義の文学作品のみならず，サファヴィー朝期イランのバーバーイー (Bābā’ī b. Luṭf, 1662 年没) のように韻文で歴史書を書いた者もいる。それらユダヤ・ペルシア語オリジナルの詩以外にも，ニザーミー (Niẓāmī, 1209 年没)，ルーミー (Ǧalāl al-dīn Rūmī, 1273 年没)，サアディー (Sa‘dī, 1292 年頃没)，ハーフィズ (Ḥāfiẓ, 1390 年頃没)，ジャーミー (‘Abd al-Raḥmān Ǧāmī, 1492 年没) ら主要なペルシア語詩人たちの詩のヘブライ文字転写も作られている。

1-4. キリル文字

ユダヤ・ペルシア語を除けば，アラビア文字以外の文字で表記され続けたペルシア語はほとんどない。しかしタジク語をペルシア語に含めるならば，ソヴィエト連邦タジク共和国において，1929年以降ラテン文字で，1940年以降はキリル文字で表記され，後者は独立後のタジキスタン共和国でも使われ続けている。タジク語は，テヘラン方言に基づく現代標準ペルシア語（以下「現代ペルシア語」）では失われた初期新ペルシア語の音韻をかなり留めている上，キリル文字は母音を表記するため，後述のようにペルシア語の音を考える際に比較の対象として便利である[12]。

2. 非アラビア文字表記言語におけるペルシア語の音写

ペルシア語の語彙や文章の音写は，ペルシア語文化圏と関わりをもったあらゆる

---

[12]ウズベク語など中央アジアのテュルク系言語もペルシア語の影響を強く受けているため，ペルシア語語源の語彙ではタジク語と同様に初期新ペルシア語の特徴を留めている場合がある。

言語の文献に残されているが，ここではそれらのうち特に重要と思われる，インド系文字・ラテン文字・漢字の三つの中から若干の例を挙げたい。

2-1. インド系文字

南アジアにおけるムスリムの影響が大きくなるにつれ，南アジア言語の文献においてもペルシア語語彙が多く見られるようになっていく。特に，サンスクリット語で書かれたペルシア語語学書には，まとまった形でペルシア語のデーヴァナーガリー文字転写がサンスクリット語訳を伴って引用されている。以下は，16 世紀のクリシュナダーサ (Kṛṣnadāsa) による『ペルシア語の輝き (*Pārasīkaprakāśa* あるいは *Pārasīprakāśa*) 』に見えるペルシア語文のデーヴァナーガリー文字転写とサンスクリット語訳の一例である[13]。

ए हजरते शाहे जलालुद्दीन दस्तगीर शव मरा दर दीन उ दुनिआं
e hajarate śāhe jalāluddīn dastagīra śava marā dar dīn u duniāṃ
हे श्री शाह जलालदीन मम हस्तावलंवप्रदो भव अमुत्रे ऽह च
he śrī śāha jalāladīna mama hastāvalaṃvaprado bhava amutre ’ha ca

これをアラビア文字に直して訳すと以下の通りである。

ای حضرت شاه جلال الدین دستگیر شو مرا در دین و دنیا
シャー・ジャラールッディーン陛下よ，信仰と世俗において私の保護者たれ。

所謂近代インド諸語の中にも，非アラビア文字でペルシア語を写したものがある。例えばグルムキー文字で書かれたスィク教の聖典『グラント・サーヒブ』の言語はほとんど初期パンジャーブ語であるが，一部にペルシア語による詩も含まれている。以下は，スィク教の始祖ナーナク (Nānak, 1469-1539 年) に帰されたペルシア語マスナヴィー詩である[14]。

---

[13]デーヴァナーガリー文字は，Weber 1889, 24 におけるローマ字転写から再現したものである。
[14]*Granth Sāhib*, 731.

ਯਕ ਅਰਜ ਗੁਫਤਮ ਪੇਸਿ ਤੋ ਦਰ ਗੋਸ ਕੁਨ ਕਰਤਾਰ	yak araj guphtam pes to dar gos kun karatār
ਹਕਾ ਕਬੀਰ ਕਰੀਮ ਤੂ ਬੇਐਬ ਪਰਵਰਦਗਾਰ	hakā kabīr karīm tū beaib parvardagār
ਦੁਨੀਆਂ ਮੁਕਾਮੇ ਫਾਨੀ ਤਹਨੀਕ ਦਿਲਦਾਨੀ	dunīān mukāme phānī tahanik dildānī
ਮਮਸਰ ਮੂਇ ਅਜਰਾਈਲ ਗਿਰਫਤਹ ਦਿਲ ਹੇਚਿ ਨ ਦਾਨੀ	mamasar mūi ajarāīl girphatah dil heci na dānī
ਜਨ ਮਿਸਰ ਪਦਰ ਬਿਰਾਦਰਾਂ ਕਸ ਨੇਸ ਦਸਤੰਗੀਰ	jan misar padar birādarān kas nes dasatangīr
ਆਖਿਰ ਬਿਅਫਤਮ ਕਸ ਨ ਦਾਰਦ ਚੂੰ ਸਵਦ ਤਕਬੀਰ	ākhir biaphtam kas na dārad cūn savad takbīr
ਸਬ ਰੋਜ ਗਸਤਮ ਦਰ ਹਵਾ ਕਰਦੇਮ ਬਦੀ ਖਿਆਲ	sab roj gastam dar havā kardem badī khiāl
ਗਾਹੇ ਨ ਨੇਕੀ ਕਾਰ ਕਰਦਮ ਮਮਈਂ ਚਿਨੀ ਅਹਵਾਲ	gahe na neki kār kardam mam'īn cīnī ahvāl
ਬਦਬਖਤ ਹਮ ਚੁ ਬਖੀਲ ਗਾਫਿਲ ਬੇਨਜਰ ਬੇਬਾਕ	badbakht ham cu bakhīr gāphil benajar bebāk
ਨਾਨਕ ਬੁਗੋਯਦ ਜਨੁ ਤੁਰਾ ਤੇਰੇ ਚਾਕਰਾਂ ਪਾ ਖਾਕ	nānak bugoyad janu turā tere cākarān pākhāk

以下は，通常のアラビア文字表記に改めたテキストとその日本語訳である。

یک ارج گفتم پیش تو در گوش کن کردگار * حقا کبیر کریم تو بیعیب پروردگار	
دنیا مقام فانی تحقیق دل دانی * منم سر موی عزرائیل گرفته دل هیچ ندانی	
جان پسر پدر برادران کس نش دستان گیر * آخر بیفتم کس ندارد چون شود تکبیر	
شب روز گشتم در هوا کردم بدی خیال * گاهی نه نیکی کار کردم منم این چنین احوال	
بدبخت همچو بخیل غافل بینذر بیباک * نانک بگوید زانو ترا تیره چاکران پاخاک	

私はあなたに敬意を表す　聞け，創造主よ

／　実にあなたは偉大，高貴にして無欠　養育者よ

よく心せよ　現世はやがて消え去る居所

／　私はイズラーイールに髪をつかまれたことも知らず

妻も子も父も兄弟も，誰も助けてはくれない

／　ついに私は地獄に落ち　神を讃えても誰も助けてくれない

私は夜も昼も空を彷徨い，悪意をめぐらした

／　何も善行をなさなかったので，今はこの有様

かくも不幸で吝嗇で怠慢で，信心もなかった

／　ナーナクは言う　あなたの前では私の膝は哀れな土の僕

2-2. ラテン文字

13 世紀のマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1324 年没) や 15 世紀のクラヴィホ (Ruy Gonzáles de Clavijo, 1412 年没) などペルシア語文化圏を旅したヨーロッパ人たちの旅行記にはしばしばペルシア語語彙のラテン文字音写が見えるが，固有名詞を除けばあまり数は多くない。本格的にペルシア語がヨーロッパ文献に記録され始めるのは 17 世紀に入ってからで，ムガル朝期南アジアに関するベルニエ (François Bernier, 1620-1688 年)，サファヴィー朝期イランに関するシャルダン (Jean Chardin, 1643-1713 年) らの見聞録には，無数のペルシア語語彙のラテン文字音写が含まれている。それらの中には単語のみならず文章が含まれる場合もあり，例えばベルニエの旅行記には以下のようなペルシア語詩がフランス語訳を添えて引用されている[15]。

Aguer chab ronzra Gouyed cheb est in
Bubayed Gouft inck mah ou peruin.
Si le Roy dit en plein midy qu'il est nuit, il faut dire que voila la Lune & les Etoiles.

明らかな誤記を修正した上でアラビア文字に直すと以下の通りである。

اگر شاه روزرا گوید شب است این　もし王が昼間に「今は夜だ」と言えば
بباید گفت اینک ماه و پروین　「おお，月と星が」と言わなければならない

同じ頃にヨーロッパ語で書かれたペルシア語語学書においてはより体系的にペルシア語のラテン文字転写が含まれる。サファヴィー朝期のイランに滞在したジェズのイグナツィオ (Ignazio di Gesù, 1596-1667 年) の『ラテン語・ペルシア語辞典 (*Dictionarium Latino Persicum*)』[16]は，アラビア文字ペルシア語語彙とそのラテン文字転写・ラテン語訳であり，1684 年にアムステルダムで出版されたラブロッセ (Joseph Labrosse = Angelo à S. Joseph, 1636-1697 年) の『ペルシア語の宝庫 (*Gazophylacium linguae Persarum*)』は大半をイタリア語・ラテン語・フランス語・

[15] Bernier 1699, 2: 45.
[16] この文献については，ヴァティカン図書館の写本カタログ Rossi 1948, 170-171 ならびに言語的分析 Orsatti 1984 を見よ。

ペルシア語の対訳語彙集に充てているが，冒頭に置かれた文字や文法の解説部分にペルシア語語彙や例文のラテン文字転写を含んでいる。

以下は，ラブロッセが挙げる例文の一部である[17]。

پاک باشد نام تو	Pak basçhed nom tu.
بیاید بما ملک تو	Biaied be ma molk tu.
شود رضاي تو چنين در زمين كه در آسمان	Sçheved rezai tu cienin der zemin ke der asmon.
ناني هرروزي همروز مارا بده	Nuni har-rouzi hemrouz mara bedeh.

他に興味深い例として，以下は共にヴァティカン図書館に所蔵されている，ペルシア語版クルアーンとそのラテン文字転写の冒頭部である[18]。

بنام خدای مهربان روزی دهنده عیب پوشانده ستایش مطلق بر نعمتهای پروردکار بیشمار ...

Benomi Joda meherebon ruzi deende aib puxende setaiex mutelaq̈ bar naametai perverdikar bixumar

2-3. 漢字

中国は古くからイラン語圏と繋がりを持ち，中期ペルシア語やソグド語など中期イラン語の語彙の音写は漢語文献に多く残されている。新ペルシア語の時代になると，アラビア語語源の語彙については直接アラビア語を写したものなのか，それともペルシア語に借用されたアラビア語語彙を写したものなのか判然としない場合もあるが，やはり多くのペルシア語語彙の漢字音写を見出すことができる。しかし，「菩薩蛮 (< musalmān)」「苔失蛮 (< dānišmand)」といった，元代までの文献に見える語はあまり正確にペルシア語の音を写し取ったとは言えないものが多い。

より体系的な音写がなされているのはやはり語学書である。明の四夷館で編纂された『回回館訳語』[19]は，刊本や写本によっても異なるが，概ね 700 ほどのペルシ

---

[17]Angelo à S. Joseph 1684, 16.

[18]写本カタログ Rossi 1948, 77-78, 81-82 が冒頭部のラテン文字版・ペルシア語版のテキストを含み，Bodrogligeti 1961 はその言語的分析と共に冒頭部の写真版も載せる。

[19]『回回館訳語』については多くの研究があるが，本田 1963 が複数の版本を参照した上で語

ア語語彙について，それぞれアラビア文字・漢字音写・対応する漢語の三つが記されている。冒頭「天文門」に見える語彙をいくつか挙げる。当時の漢字の音価自体が一つの問題であるが，ここでは便宜上，一般的な近世音の再構音を添えておく。

アラビア文字	漢字音写	漢語
آسمان	阿思媽恩 [ɔ sɪ ma ən]	天
آفتاب	阿夫他卜 [ɔ fu tʰɔ pu]	日
ماه	媽黒 [ma xəj]	月
ستاره	洗他勒 [si tʰɔ ləj]	星
ابر	阿卜兒 [ɔ pu ʐʅ]	雲
باد	巴得 [pa təj]	風
باران	把刺恩 [pa la ən]	雨

『回回館訳語』の漢字音写は，後述のように部分的にはアラビア文字よりも正確にペルシア語の音韻を伝えている。

明末以降盛んとなった漢語イスラーム思想文献も，ペルシア語スーフィー文献の影響を強く受けているため多くのペルシア語語彙の音写を含んでいる。以下は，張中 (1670 年没) 『帰真総義』に見える音写の例である[20]。

漢字	現代ペルシア語
別各納 [pjɛ kaw na]	بیگناه bīgunāh
躲雑黒 [tɔ tsa xəj]	دوزخ dūzaḫ
秘希世 [pi xi ʂi]	بهشت bihišt

3. 非アラビア文字資料が伝えるペルシア語の音

以上のような非アラビア文字で表記されたペルシア語は，ペルシア語文化圏で書

彙のリスト化を行っており便利である。最近出版された刘 2008 は誤りが多く，利用には注意を要する。

[20] 『歸眞總義』10 葉裏。

かれた膨大なアラビア文字ペルシア語文献と比べればごく僅かな，例外的な事例にすぎない。しかしその一方で，アラビア文字資料からは全く知りえない情報を伝えている面もある。それはペルシア語の音である。非アラビア文字によるペルシア語からは，アラビア文字には表れない音韻上の区別や変化の有無を知ることができるのである。それは，アラビア文字と同系統であるため文字体系が近似しているヘブライ文字などよりも，それらとは全く異なる体系をもつ文字の文献によく表れている。例として，ここではペルシア語音韻史上重要な以下の二つの問題を取り上げて検討したい。

（1）マジュフール (mağhūl) 母音

マジュフール母音とは初期新ペルシア語がもっていた /ē/ と /ō/ のことで，現在でもタジク語をはじめいくつかの方言に残っているが，現代ペルシア語ではそれぞれ /ī/ と /ū/ に合流し失われている。アラビア文字では，/ē/ と /ī/ は共に ی で，/ō/ と /ū/ は共に و で表されるため，その区別の有無は全く知ることができない[21]。

それらは，まず南アジアで書かれたムガル朝期のインド系文字文献においては明瞭に区別されている。例えば先述のクリシュナダーサ『ペルシア語の輝き』に採録されている語彙や，『グラント・サーヒブ』のペルシア語詩から現代ペルシア語で /ī/ や /ū/ を含む語彙を以下のようにいくつか抽出してタジク語と比較してみると，それぞれ /ē/ や /ō/ と区別していることがわかる。

Pārasīkaprakāśa[22]	*Granth Sāhib*	現代ペルシア語	タジク語
गीर gīr	ਗੀਰ gīr	گیر gīr	гир
पेश peś	ਪੇਸਿ pes	پیش pīš	пеш
वेफायदा vephāyadā	–	بیفائده bīfā’ida	бефоида
–	ਬੇਐਬ beaib	بیعیب bī‘ayb	беайб
–	ਚੁੰ cun	چون čūn	чун

[21]マジュフール母音については，Horn 1898-1901, 32-37; Meier 1981, 113-156 などを参照。
[22]デーヴァナーガリー文字は，Weber 1887; Weber 1889 におけるラテン文字転写より再現した。なおここでは語末母音の a を省いてある。

गोश goś	ګوش gos	گوش gūš	гӯш
रोज roj	ړوج roj	روز rūz	рӯз

同じくムガル朝期のペルシア語音写を含むベルニエの旅行記でも，これら語学書と比べてあまり明瞭ではないが，ある程度同様の区別をしていた可能性がある[23]。一方サファヴィー朝期イランのペルシア語を写したラテン文字文献にはその区別は見られない。

一見他言語の音写には不向きに思える漢字も，音韻上の区別に関してはアラビア文字よりも多くの情報を伝えている場合がある。例えば『回回館訳語』において，現代ペルシア語 /bī/ は主に「必」「比」「別」で表されるが，その使い分けが恣意的なものでなかったことは，タジク語との対応からもわかる。

番号[24]	漢字	現代ペルシア語	タジク語
166	忒**必**卜	طبیب ṭabīb	табиб
188	得**必**兒	دبیر dabīr	дабир
899	**必**思忒	بیست bīst	бист
278	忒勒**比**丹	طلبیدن ṭalabīdan	талабидан
307	**比**你	بینی bīnī	бини
263	**別**搭兒	بیدار bīdār	бедор
350	**別**媽兒	بیمار bīmār	бемор
461	**別**黑	بیخ bīḫ	бех
639	**別**魯恩	بیرون bīrūn	берун

漢語近世音で「必」「比」は [pi] ,「別」は [pjɛ] なので，それぞれ /bī/ と /bē/ を表していたことは明らかである[25]。同様の手続きにより，/ū/ と /ō/ についても若干の揺れがあるものの区別していたことがわかる。

(2) 母音 /ā/ の後舌化

[23]例えば Peiche < پیش /pēš/ に対して，Pire < پیر /pīr/ [Bernier 1699, 2:218, 268]。
[24]本田 1963 において付された番号である。
[25]後者に i 介音が入っているのは，主母音単独で e 音を表す韻母が無いためだろう。

/ā/ は現代ペルシア語，タジク語など多くの方言で後ろ寄りに発音され，よく円唇化を伴う。その現象は，キリル文字表記のタジク語では o で表記され反映されているが，アラビア文字には全く現れない。しかし非アラビア文字資料においては，マジュフール母音ほど明確ではない場合が多いものの，その現象を反映した綴りが残されていることがある。それが最もよく見られるのが，サファヴィー朝期以降のイランのペルシア語を反映したラテン文字文献である。例えばシャルダンの最初の著作『ソレイマーンの戴冠』では /ā/ が多く a や aa と写されているが，鼻音 (n と m) 前では o や oo としている場合がある[26]。より体系的な語学書，例えば先述のイグナツィオやラブロッセの著作では，かなり明確に鼻音前では o，それ以外では a と写し分けており，またペルシア語訳クルアーンのラテン文字転写でも同様である[27]。従って少なくとも鼻音の前においては /ā/ の後舌化ないし円唇化がかなり明瞭であったこと，あるいはそれが鼻音の前から始まったことがわかり，そのことは現代ペルシア語において /ā/ の後舌・円唇化が鼻音前で特に強いこととも符合する。ラテン文字以外の資料では /ā/ の後舌・円唇化は確認できない場合が多いが，イランのヘブライ文字ペルシア語で /ā/ を וw で表す例がある[28]。一方イラン以外の地域に関しては，上に挙げたインド系文字・ラテン文字・漢字の資料においては確認することはできないが，18 世紀末に日本で書かれた『訳詞長短話』における仮名文字表記されたペルシア語では鼻音前の /ā/ に後舌・円唇化の傾向が見える[29]。

これら二つの例からも分かる通り，アラビア文字には現れないペルシア語の音の区別や変化を非アラビア文字資料によって一部再現することができる。ペルシア語音が非アラビア文字文献で区別されていない場合には必ずしもペルシア語にその区

---

[26] 例えば Chardin 1671 において，Ṭabaristān > Teber-Estoon (p. 7); ḥukkām > Hokkom (p. 130); Ḫurāsān > Corasson (p. 239 etc.); Kirmānšāh > Kirmoon-cha (p. 350) に対して，Dāmġān > Damagaan (p. 5); Māzandarān > Mazenderan (p. 21 etc.)。

[27]Orsatti 1984, pp. 51; Bodrogligeti 1961, 267 を参照。ただしラブロッセの著作 [Angelo à S. Joseph 1684]では，pp. 16-17 のペルシア語例文のラテン文字転写では正確に写し分けられているのに対し，pp. 5-7 の語彙集ではやや揺れがある。

[28]Lazard 1968, 84 は 17 世紀イランのユダヤ・ペルシア語文献における ān > און 'wn や āmad > אומד 'wmd などの例を挙げる。ただしそれはあくまで例外であり，一般にユダヤ・ペルシア語文献において /ā/ は א ' で表記されるか，母音符号以外では表記されない。

[29]長島 1986 に基づきいくつか例を挙げる。arzān > アルゾン; girān > ゲロン; ramażān > ラマゾン; bārān > パロン。ただし āsmān > アスマン。

別がなかったとはいえないが，逆に非アラビア文字文献である程度体系的な区別が確認できる場合にはペルシア語音でも区別があったと考えるべきで，その区別は当然，アラビア文字ペルシア語を読む際にも反映していただろう[30]。アラビア文字ペルシア語は文語であるとはいえ，その運用の場においては音読もしていたはずである。ペルシア語文語は相当な均一性を保ってきたので，同じペルシア語文はどこで誰が読んでも基本的に同じ意味を汲み取ることができたが，その発音の仕方には時代や地域によって差異が生まれていた。その差異は，綴りがほぼ固定していたアラビア文字には全く現れなかったが，綴り上の規範から比較的自由な非アラビア文字文献においては，時に意識的に，時に無意識に，記録されてきたのである。

まとめ

非アラビア文字ペルシア語は，ペルシア語文化圏研究の資料として様々な可能性を持っている。まずマニ文字やヘブライ文字で書かれた初期新ペルシア語は，「沈黙の二世紀」が明ける前後のペルシア語に関する数少ない貴重な記録であり，ペルシア語使用の歴史を考える際には不可欠の資料である。さらにその後非アラビア文字文献が記録してきたペルシア語の音は，文語としては相当な均一性を保っていたペルシア語が音に関しては多様であったことを示している。現存する非アラビア文字資料はペルシア語文化圏の全時代全地域を覆うわけではないという限界はあるものの，それらを可能な限り網羅的に検討することでかなりの程度ペルシア語音の時代的・地域的差異を明らかにできるはずである。それによって，例えば中国でのペルシア語の漢字音写におけるマジュフール母音の有無など音の特徴を見てそのペルシア語の担い手の出自を推定する，といったことも可能である。非アラビア文字資料は，ペルシア語文化圏における人の移動を跡付ける手掛かりともなるのである。

ペルシア語文化圏の一体性を支えていたのはペルシア語文語の均一性であったが，その背後には音の多様化の歴史があった。ペルシア語文化圏で共有されていた詩文学をはじめとする古典作品は語彙や文法の面ではペルシア語の規範化や均一性の維

---

[30] ユダヤ教徒など特定の宗教的コミュニティーで用いられていたペルシア語はムスリムのペルシア語と文字以外の点でも差異があり得たことも考慮する必要があるが，それらは宗教的コミュニティー固有の特徴というよりむしろ，文語としての規範化が進んだアラビア文字ペルシア語には現れない口語・方言を反映している可能性が高い[Lazard 1974, 313]。

持に貢献していたが，音に関してはその力はなかった。サファヴィー朝とムガル朝の間で行われていたような人材の交流も，多様化していくペルシア語音を再び均一にすることはなかった。アラビア文字ペルシア語のような表音文字言語も，文語として一定の均一性を保持しつつ音の面では時代的・地域的差異を拡大させていった漢語のような表意文字言語と，程度の差こそあれ同じ道を辿ったのである。

参照文献

Angelo à S. Joseph. 1684. *Gazophylacium linguae Persarum, triplici linguarum clavi Italicae, Latinae, Gallicae, nec non specialibus præceptis ejusdem linguæ reseratum.* Amstelodami: ex officinâ Jansonio-Waesbergiana.

Asmussen, Jes P. 1965. "Judaeo-Persica II: The Jewish-Persian Law Report from Ahwāz, A. D. 1020." *Acta Orientalia* 29/1-2: 49-60 + Plate I.

Bernier, François. 1699. *Voyages de François Bernier, docteur en medecine de la Faculté de Montpellier, contenant la description des Etats du Grand Mogol, de l'Hindoustan, du Royaume de Kachemire, &c.* 2 vols. Amsterdam: Paul Marret.

Bodrogligeti, András. 1961. "The Persian Translation of the Koran in Latin Letters." *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 13/3: 261-276.

Boyce, Mary. 1960. *A Catalogue of the Iranian Manuscripts in Manichean Script in the German Turfan Collection.* Berlin: Akademie Verlag.

Chardin, Jean. 1671. *Le couronnement de Soleïmaan, troisiéme roy de Perse, et ce qui s'est passé de plus memorable dans les deux premieres années de son Regne.* Paris: Claude Barbin.

Gnoli, Gherardo. 1964. *Le iscrizioni giudeo-persiane del Ġūr (Afghanistan).* Roma: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Henning, Walter Bruno. 1956. "The Inscriptions of Tang-i Azao." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 20: 335-342.

Henning, Walter Bruno. 1962. "Persian Poetical Manuscripts from the Time of Rūdakī." *A Locust's Leg: Studies in Honour of S. H. Taqizadeh.* 89-104. London: Lund Humphries.

本田實信 1963.「「回回館訳語」に就いて」『北海道大学文学部紀要』11: 224-150.

Horn, Paul. 1898–1901. "Neupersische Schriftsprache" *Grundriss der iranischen Philologie.* eds.

Wilhelm Geiger & Ernst Kuhn. I/2, 1-200. Strassburg: K. J. Trübner.

Lazard, Gilbert. 1968. "La dialectologie du judéo-persan." *Studies in Bibliography and Booklore* 8/2-4: 77-98.

Lazard, Gilbert. 1974. "Judaeo-Persian." *Encyclopaedia of Islam*. New edition, vol. 4 fasc. 65-66, 308-313. Leiden: E. J. Brill.

刘迎胜 2008.『《回回馆杂字》与《回回馆译语》研究』北京: 中国人民大学出版社.

MacKenzie, David Neil. 1966. "Ad *Judaeo-Persica II* Hafniensia." *Journal of the Royal Asiatic Society* 1966/1-2: 69.

Maggi, Mauro. 2003. "New Persian Glosses in East Syriac Texts of the Eighth to Tenth Centuries." Paul 2003. 111-145.

Meier, Fritz. 1981. "Aussprachefragen des ältern Neupersisch." *Oriens* 27-28: 70-176.

Moreen, Vera Basch. 2000. *In Queen Esther's Garden: An Anthology of Judeo-Persian Literature*. New Haven & London: Yale University Press.

森本一夫 2009.「ものを書くことから見たペルシア語文化圏——その面的把握をこえて——」森本一夫（編）『ペルシア語が結んだ世界——もうひとつのユーラシア史——』1-36. 札幌: 北海道大学出版会.

Müller, Friedrich Wilhelm Karl. 1915. "Ein syrisch-neupersisches Psalmenbruchstück aus Chinesich-Turkistan." *Festschrift Eduard Sachau*. ed. Gotthold Weil. 215-222 + Taf. II. Berlin: Verlag von Georg Reimer.

長島弘 1986.「『訳詞長短話』（第五巻）モウル語復元試論」『長崎県立大学経済学部論集』20: 57-86.

Orsatti, Paola. 1984. "Sistema di trascrizione e fonetica neopersiana nel *Dictionarium Latino-Persicum* di p. Ignazio di Gesù." *Annali* (Istituto universitario orientale di Napoli) 44/1: 41-81.

Orsatti, Paola. 2003. "Syro-Persian Formulas in Poetic Form in Baptism Liturgy." Paul 2003. 147-176.

Paul, Ludwig ed. 2003. *Persian Origins: Early Judaeo-Persian and the Emergence of New Persian*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Rossi, Ettore. 1948. *Elenco dei manoscritti persiani della Biblioteca vaticana*. Città del Vaticano: Biblioteca apostolica vaticana.

Shaked, Shaul. 1988. "An Early Geniza Fragment in an Unknown Iranian Dialect." *A Green Leaf: Papers in Honour of Professor Jes P. Asmussen*. 219-235. Leiden: E. J. Brill.

Stein, Marc Aurel. 1907. *Ancient Khotan*, 2 vols. Oxford: The Clarendon Press.

Sundermann, Werner. 1974. "Einige Bemerkungen zum syrisch-neupersischen Psalmenbruchstük aus Chinesisch-Turkistan." *Mémorial Jean de Menasce*. ed. Philippe Gignoux & Ahmad Tafazzoli. 441-452. Louvain: Imprimerie orientaliste.

Sundermann, Werner. 1989. "Ein manichäischer Bekenntnistext in neupersischer Sprache." *Études irano-aryennes offertes à Gilbert Lazard*. ed. Charles-Henri Fouchécour & Philippe Gignoux. 355-365. Paris: Association pour l'avancement des études irannienes.

Sundermann, Werner. 2003. "Ein manichäischer Lehrtext in neupersischer Sprache." Paul 2003. 243-274.

梅棹忠夫 1956.『モゴール族探検記』東京: 岩波書店.

Utas, Bo. 1969. "The Jewish-Persian Fragment from Dandān-Uiliq." *Orientalia Suecana* 17 (1968): 123-136.

Weber, Albrecht. 1887. *Über den Pârasîprakâça des Kṛishṇadâsa*. Berlin: Verlag der Königl. Akademie der Wissenschaften.

Weber, Albrecht. 1889. *Über den zweiten, grammatischen, Pârasîprakâça des Kṛishṇadâsa*. Berlin: Verlag der Königl. Akademie der Wissenschaften.

張中 1878.『歸眞總義』敍城蘇世泰重刊本. ［成都］: 寶眞堂, 光緒 4 年.